

日本における人身取引の被害者

国際被害者学研究所第7回シンポジウム（国連大学、国際移住機関と共催）



▲特別スピーチのジェーン・シグモン氏。
“現代の奴隷制度”とも言われる人身取引が、国境を越えて多数の国を巻き込み発生している状況を説明した。

れ、人身取引被害者に与えられた法的権利が非常に弱いことが指摘された。セッションでは、民間機関との連携強化や再被害防止の視点から定住者への支援のあり方が提言された。最後の挨拶では、人身取引被害者の人権を守る上でも、今後、独立した法律を練っていくことが必要であろうとの見解が示された。国際被害者学研究所では、引き続き、この度の発表内容を大会提言としてとりまとめ、政府の関係機関につなぐ作業を行う予定である。

10月6日、国際被害者学研究所第7回シンポジウムが国連大学にて開催された。テーマは「日本における人身取引の被害者」。特別講演者に、米・国務省人身売買監視対策室室長上席顧問のジェーン・シグモン氏、インドネシア・証人および被害者保護機構会長のアブドゥール・セメンダワイ氏といった、国を挙げて人身取引対策に取り組む機関から専門家を迎え、基調講演には、米・カリフォルニア州立大学サクラメント校教授のシン・レン氏、国際移住機関（IOM）の駐日代表ウィリアム・バリガ氏にも登壇いただき、国内外の視点から、日本における人身取引対策の実情と被害者支援の課題を明らかにした。この問題に日本で長年取り組む専門家によるパネル発表では、人身取引が巧妙化、複雑化している事例や、過去に見られた外国人研修生の実態が紹介され、



▲全国各地から集まった参加者でホールは満席となった。活発に行われた質疑応答には、智学館中等教育学校から参加した4年次生3名も加わった。

学生の「考える力を育成する」

常磐短期大学 FD 研修会を開催

常磐短期大学 FD 研修会（授業研修分科会）が、9月18日にQ棟センターホールおよびQ棟ラバツツアで開催された。分科会を実施するのは今回が初めて。短期大学の教員20名と大学FD委員会から8名の教員が参加し、普段行われている授業の課題や、学生たちの意識などについて話し合われた。

今回のテーマは「考える力を育成する」。最初に短期大学FD委員会副委員長の高橋眞知子教授が概要を説明した後、分科会として「講義」と「演習」の2つの授業形態に分かれ研修を実施した。

研修は、まず学生の現状を把握することから開始。実際の授業での体験談や感想等について、参加者全員が報告を行った。その後、報告内容について意見交換がなされ、学生の興味や関心を引きつけるためには、どのような授業を行うべきかなど、実践に即した対応策が検討された。

短期大学ではこれまでも、教員が自由に他の教員の授業を参観できる公開授業を行うなど、積極的にFD活動に取り組んでいる。今後も教員たちのさまざまな情報共有の場を設けることで、学生たちに質の高い教育を提供できる環境を整えていく考えだ。



▲学生の作品を参考に議論を行う演習グループ。



▲授業の体験を基に意見交換する講義グループ。

社会福祉士を目指す学生たちを支援

「学校法人常磐大学 ローズヴィラ水戸奨学金制度」を創設

学校法人常磐大学は、一般財団法人安寿苑と連携し、「学校法人常磐大学 ローズヴィラ水戸奨学金制度」を創設した。

対象となるのは、社会福祉士を目指すコミュニティ振興学部ヒューマンサービス学科の3年生と4年生から若干名。年間総額160万円の奨学金が分配のうえ給付され、返還は不要となる。対象者は書類審査および面接審査の結果を総合的に判断し、決定する。

今回、奨学金給付の対象となったのは、3年の善場真菜さんと4年の西野はるなさん。善場さんは「地域の人のためになれる仕事に就きたくて、社会福祉士を目指しています。奨学金は、介護事務や福祉住環境コーディネーターなど、さまざまな資格に挑戦するために使わせていただきたいと思います。これから実習があるので、福祉の現場を肌で感じて、自分らしさが出せる施設で働きたいです」と、将来の目標を語っていた。西野さんは「高校生のとき、吹奏楽部の活動の一環として老人福祉施設などで演奏をしているうちに、福祉の勉強がしたいと思い、ヒューマンサービス学科に入学しました。奨学金は、社会福祉士の国家試験の模試などに使わせていただきたいと思います。絶対に国家試験に合格しなければ、というプレッシャーもありますが、少しでも人を笑顔にする仕事ができるように頑張らなければならないと思っています」と、奨学金を受け取る責任の重さを垣間見せた。



▲ローズヴィラ水戸の菊池孝夫総務部長(左)と給付対象学生。



▲善場真菜さん。



▲西野はるなさん。

優れた英語力を身に付けた学生たちを表彰

人間科学部 英語表彰制度“English Award”



▲人間科学部の富田信徳学部長から賞状を受け取る学生たち。

グローバル化が進む現代社会において、国際公用語とも言われる英語力の習熟は非常に重要な要素となっている。そこで、人間科学部では、英語能力検定試験等において一定以上の評価を得た学生を表彰する制度を策定した。学生が積み重ねてきた個々の努力を学部として表彰することにより、この制度が学生たちの英語力のさらなる向上を目指す糧となることを目的としている。この制度は、今後、各セメスターごとに実施される。CASECの高得点を取得したことでPlatinum賞を受賞した2名にお話を伺った。心理学科1年の岩崎真弥さんは「英語は自分に必要な情報を手に入れるときに便利な言語なので、これからも力を入れて学習したいと思っています。大学では高校の受験勉強とは違い、英語の活かし方や面白い洋書などを教えていただけるので、勉強がとても楽しいです。今後も英検やTOEICなどに挑戦し、ステップアップしていきたいです」と、抱負を語った。現代社会学科2年の猪狩愛美さんは「大学に入学してから、英語の勉強をこつこつ頑張ってきたことが賞という形に表れ、さらに励もうという気持ちになりました。常磐大学は英検やTOEICなどの受験に特化した講義を受講することもできるので、とても良い環境が整っていると思います。今は留学に興味があるので、海外で語学だけではなく文化的なことも学び、さまざまな視点から物事を捉える知識を身に付けたいです。資格に関しても、英検1級を目指して頑張ろうと思っています」と語っていた。

■表彰の種類および基準について

	CASEC	実用英語技能検定	TOEIC	TOEFL
Diamond	800-	1級	860-	PBT 550-; iBT 79-
Platinum	650-	準1級	730-	PBT 500-; iBT 61-
Gold	500-	2級	550-	PBT 450-; iBT 45-



▲岩崎真弥さん(左)と猪狩愛美さん(右)。

ナラティブと対人支援 ～語り・病い・人生～

● 常磐大学心理臨床センター主催 公開講演会開催

常磐大学心理臨床センター主催の公開講演会が、10月21日に開催された。今回、講師としてお招きしたのは、秋田大学教育文化学部附属教育実践研究支援センター教授で臨床心理士の柴田健氏。「ナラティブと対人支援～語り・病い・人生～」という演題で、現在、さまざまな臨床実践において重要視されている「語り（ナラティブ）」について、レクチャーしていただいた。

講演で柴田氏は「錯視」を使い、我々が見ているものは不確かで、外界をそのまま認識しているわけではないことを体験を通して分かりやすく解説した。次に、社会の認識について、同じ現象でも、「考える角度を変えると捉え方も違ってくる」と例題を通して問題提起した。さらに、本題の「語り」について、現実とは人々の言語的な相互交流の過程の中で構築されると説明。我々の語りは社会の中でいろいろな影響を受けるが、新たに紡ぐこともできると説いた。新たな語りを生み出す方法としては、問題を外在化することを紹介。この方法は人の心の中の問題を客観化・人格化して励ます治療の一つ。そして柴田氏は、問題が起きた時に、原因を追及しその原因に対するアプローチから解決を導こうとするのではなく、その問題をどうしたいか、何ができるか、最初から解決に向けたプロセスを構築していく方法を提案した。講演は臨床の現場で起きた事例などを織り交ぜながら展開され、ナラティブの重要性を踏まえた実践的な対人援助策まで学ぶことができた。



▲講演会では、臨床心理に関心のある一般の方々や学生たちが熱心に耳を傾けた。



▶講演を行う柴田健氏。



▲研修会で行われたワークショップ The Tree of Life。

また、講演会に先立ち、大学院生や臨床心理士などを対象とした研修会が実施された。この研修会で柴田氏は講演に沿った内容に加え「The Tree of Life（人生の樹）」という技法を紹介。この技法は、自分の人生を一本の樹に例えて描くというアートセラピーの一種で、トラウマを抱えた子どもたちなどに有効だと言われている。研修の最後には参加者全員で The Tree of Life のワークショップを行うなど、体験的に学べる貴重な機会となった。

新聞記者が活躍する取材現場を肌で体験

● 茨城新聞移動編集局に一日市民記者を派遣

9月30日にケーズデンキスタジアム水戸で行われた「水戸市の日」関連イベントである「いばらき！ホーリーホック1万人祭り」に、国際学部経営学科2年の佐藤初美さんが一日市民記者として派遣された。この派遣は、「茨城新聞移動編集局～ケーズデンキスタジアム水戸会場」の臨時開局に伴うもので、当日行われた県内各地よりすぐりのグルメブースや、茨城交通による「らくがきバス」の体験ブースなどのイベントを、茨城新聞社の記者と共に取材。作成した記事を、翌日の特集紙面に掲載するという企画だ。

佐藤さんは「初対面の来場者に突然話しかけ、話を広げていくことはとても難しかったです。質問する内容などをもう少し考えておけば、もっとさまざまなお話が聞けたのではないかと思います。しかし、自分とは違った世代の方々とコミュニケーションをとる能力は、これからも重要になってくるスキルです。来年から就職活動が始まりますが、そういった意味でも今回の市民記者はとても良い経験となりました。新聞社などの仕事は大変だと分かりましたが、その分、やりがいも感じる事ができたので、少しだけマスコミ関係にも興味が湧いてきました」と、一日記者を務めた感想を語っていた。



▲茨城新聞の記者と打ち合わせをする佐藤さん。



▲委嘱状を受け取る佐藤初美さん。



▲メモを取りながら丁寧な取材が行われた。

Tokiwa Interview

第15回常磐フォーラム(2012年10月4日開催)より

まちの魅力“創造と発信”

高橋 靖氏

(水戸市長)

株式会社ブランド総合研究所が行う地域ブランド調査で、毎年、下位に低迷する茨城県。県庁所在地である水戸市も、観光都市としてブランド力を向上させることが非常に重要なテーマとなっている。そこで水戸市長の高橋靖氏に、水戸市のイメージアップ戦略についてお話を伺った。

「目的を達成するためには、優れた組織を作りリーダーがしっかりとマネジメントすることが必要です。そこで広報戦略を担う『みとの魅力発信課』を設置しました。人事も特定業務に関わる職員の庁内公募を初めて行い、意欲のある若い職員を抜擢。若い感性や価値観を持って、ソーシャルメディアなどを活用した広報活動を行っています。これまでの行政では考えられない禁じ手も許可しました。例えば、特定の果樹園農家や個人経営の菓子店などの紹介を、水戸市のホームページにリンクしたブログ上に掲載する。一企業の利益につながると、批判されるかもしれませんが、地域を活性化するためには、官民の協力体制強化が不可欠です。頑張る水戸人を応援するために、指摘は全て、私が受け止める覚悟です。民間が主催するイベントなどにも職員が直接飛び込みお手伝いすることで、市民の中にずいぶん溶け込んできました。もちろん私自身もトップセールスとして、イベントなどにできる限り参加しています。さらに、観光振興の一環として、優良タクシードライバーの認定事業もスタートしました。接客やもてなしに関する研修プログラムを作り、その講義を受講しスキルを得たドライバーに認定証を交付。市のホームページや広報誌などで認定されたドライバーをPRするとともに、優良乗務員認定のステッカーも贈呈しています。こうした取り組みをさまざまなサービス分野にも拡大し、観光マイスターとして水戸市が公認する制度も検討しています」

水戸市の新しい取り組み事例

人材を活用した取り組み以外にも、人を集めるためのさまざまなコンテンツ創出にも取り組んでいる。

「まず、コインパーキングばかりになってしまった中心市街地を活性化しなければなりません。そこでコンパクトシティをコンセプトとしたまちづくりを考えています。住・業・遊・学・医などの都市機能を凝縮させ、人の流れを作るのです。そのために、土地所有者が住宅や店舗を建てやすい環境を整える必要があります。現在、制度設計を進めています。また、水戸の観光資源の掘り起こしも重要です。保和苑周辺から水戸八幡宮なども含めたロマンチックゾーンの整備、四季折々の花を楽しみながら回遊できる花の名所づくり『水戸の花絵巻事業』の推進など、新しい観光拠点の開発も順次行う計画です。教育面からのアプローチとして『さがけプラン』という学力向上事業も展開する計画です。小中学校に習熟度別学習を取り入れるなど、公立学校の限界に挑戦しようと考えています。魅力ある教育を水戸スタイルとして確立し、『優れた教育を受けられるから水戸に住もう』と思っていただけるブランドを構築すると同時に、学問の府である水戸から、日本で、世界で活躍する人材を一人でも多く輩出できたらと考えています」

水戸の魅力を創出するための、既成概念にとらわれない斬新な政策に多くの期待が寄せられている。



たかはし やすし ●1965年生まれ。明治大学大学院政治経済学研究科修士課程修了。水戸市議会議員3期、茨城県議会議員2期、水戸市長1期。●主な所属団体及び役職／茨城県なぎなた連盟副会長、茨城県行政書士会顧問、茨城県建築士会顧問、水戸市体育協会会長。

●2012 年度卒業予定者の就職状況

厳選採用、新卒非正規採用の広まりなど厳しい就職環境が続いている中、常磐大学・常磐短期大学においては、内定率が昨年同時期（10月）比5%の改善を見せている。キャリア支援センターでは就職活動を継続している学生に対応するために、指導教員との連携、求人情報の受発信、1日約50件を超える窓口相談、履歴書の添削、個別面談指導などを、積極的に展開している。また、茨城県のジョブカフェ、ハローワーク、雇用人材協会とも連携し、就職相談や求人先の紹介を推進している。

●2013 年度卒業予定者への就職支援

キャリア支援センターでは、ゼミナール担当教員と連携して「進路登録カード」による学生個人ごとの進路指導の展開を進めるとともに、多彩な就職支援を実施している。これらプログラムを十分に活用することで、円滑な就職活動へとつなげたい。

【就職支援プログラム】

- ① **業界研究講演会**／企業人事担当者から具体的な仕事内容について解説。ミスマッチの防止を促す。
- ② **職種研究セミナー**／キャリア支援センター職員が主体となって職種ごとに求められる知識や能力を解説。志望動機の設定・明確化を促す。
- ③ **就職実践講座**／個人面接やグループディスカッションなどを実施。より実践的なスキルを身に付ける。

他、キャリアデザイン講座、就職ガイダンス、学内会社説明会等。



▲業界研究講演会。

常磐フォーラム・学生発表

●女子学生の視点から「夜梅おみくじ」を企画

10月4日に開催された第15回常磐フォーラムで、人間科学部コミュニケーション学科の2年生を中心としたグループが「夜梅おみくじ企画」の学生発表を行った。

このおみくじは、3月3日に偕楽園および常磐神社で開催された「第7回夜・梅・祭」の主管団体である一般社団法人水戸青年会議所の依頼を受けて作成・販売されたおみくじ型のツール。「来場者が『ほっこり』した気分になるようなおみくじ」「来場者が夜梅祭会場内を回遊し、これまで知らなかった偕楽園・常磐神社の魅力に気づき、これまでに参加したことのなかったイベントに参加してみたいと思える回遊ツール」の2つをコンセプトに、有志チームでアイデアを出し合いながら企画を立案した。おみくじのデザインやテキストなども全て学生が手掛け、女子学生ならではのきめ細かい、遊び心に溢れたコンテンツとなっている。

おみくじは全部で17種類。「運勢」の欄には、「大吉」「小吉」の代わりに、梅にちなんだ「満開」「八分咲き」などの言葉をあて、その運勢に対応した「御言葉」が表面に記されている。裏面にはさらに「運勢」と「御言葉」に対応した「今日のおすすめ」が記され、おみくじを引いた来場者にイベント会場を案内する仕組みになっている。

当日は常磐フォーラムで講演を行った高橋市長や森学長もおみくじを引き、女子学生ならではの工夫に感心していた。

また、産学連携プロジェクトとして、人間科学部健康栄養学科の学生たちによる「常磐大学×あさ川製菓 地域ブランド菓子 共同開発」の紹介も行われ、常磐大学の実学への取り組みをアピールした。



▲おみくじを引く高橋市長。



▲夜梅おみくじ企画をプレゼンテーションする学生たち。

常磐大学・常磐短期大学

News!

2012 ときわ祭開催!

地域の人々とのふれあいを通して、学生たちの日頃の活動を発表する2012ときわ祭が、10月27日～28日に開催された。今回のテーマは『『ときわなう。』～みんなが『いいね!』と言っています～』。このテーマは、いま話題となっているSNSサイトで広く使われている言葉がモチーフ。常磐大学をより多くの人に知っていただきたいという思いが込められている。

当日は子どもたちに人気の戦隊ショーや毎年大好評のお笑いライブ、精神科医で京都精華大学客員教授の名越康文氏による講演会などが行われ、来場者を楽し



▲「ときわんこ」もときわ祭にデビューした。

ませていた。また、この日、初披露となった常磐大学のマスコットキャラクター「ときわんこ」の着ぐるみも登場し、会場を盛り上げていた。

英語に堪能な高校生を選出

第7回TOKIWA 高校生英語スピーチコンテストが、10月27日にQ棟センターホールで開催された。



このコンテストは、決 ▲高橋一智さん(左)。

められた演題に沿った内容の英語によるスピーチを、4分以上5分以内で行うもの。内容、発音・アクセント、発表態度などの審査項目で採点し、優秀な発表者の表彰を行う。今回のテーマは「私と世界の未来を考える」。出場した高校生たちは流暢な英語を駆使し、熱くそれぞれの考えをスピーチした。

今回1位に選ばれたのは、埼玉県立不動岡高等学校2年の高橋一智さん。“Express Yourself”というタイトルで、自分の考えや意見を相手に伝えることの大切さを語った。高橋さんは「法律にも興味があるので、将来は英語を使って海外の日本企業のお手伝いができるような仕事に就きたいです」と笑顔をのぞかせた。

常磐大学 高等学校

News!

ときわ祭「創造～新たなスタートライン～」



▲大盛況の飲食加工部門。

ラーメン、チュロス、タピオカジュースなどを各クラスが工夫を凝らして販売し、その美味しさに大行列ができたほどだった。講堂・体育館3階では、吹奏楽部の演奏や演劇部による舞台など、文化祭を彩る素晴らしい発表があった。さらに、卒業生である天野翼さん、荻沼修平さんの所属するバンド「THE RAVE」や、口だけでリズムを作り上げ、音楽を表現するヒューマンビートボックスの“JAPAN HUMAN BEATBOX CHAMPIONSHIP 2011”ソロ優勝者のTATSUYA氏を招待し、ライブを開催。大盛況のうちに2日間のプログラムが終了した。

それぞれのクラスや部活動において、協力し合い、絆を深める有意義な機会となった。生徒たちが作り上げたこのときわ祭の伝統を、後輩へと継承していけるものにしていきたい。

9月13日～14日、東日本大震災の影響で2011年度から延期となっていた、ときわ祭が開催された。今回はテーマとして「創造～新たなスタートライン～」を挙げ、生徒の笑顔が溢れる2日間になった。全体企画としてエコキャップアートを実施。原画は美術部からの協力を受け、ウサギと亀をモチーフに、「人それぞれのペースで前に進もう」という願いを込めて制作し、好評を博した。展示部門では、東日本大震災についてレポートをまとめた発表や、「命の大切さ」を伝えようと日本赤十字社とタイアップしての発表など、日頃の学習の成果が発揮された。飲食加工部門では、



▲エコキャップアート。

智学館カップー全校生が熱く競い合うスポーツイベントー

智学館カップとは、智学館中等教育学校に隣接している小吹グラウンドで毎年行われるスポーツイベント。在校生アンケートでも「盛り上がる行事部門」で1位に選ばれるほどの人気の行事で、2011年度よりクラスマッチ形式から全学年で縦割りした2グループによる団対抗形式に変わった。「競技の部」「応援の部」共に赤団・青団に分かれ、それぞれの団で生徒たちが中心になって積極的に行事を盛り上げていく姿が見られた。「競技の部」では団対抗リレーやスウェーデンリレー（各団の選抜選手によるリレー）が一番の盛り上がりを見せた。また、毎年生徒たちからアイデアが出される障害物競走はどれもユニークな競技になっており、一生懸命取り組む中でも常に大きな歓声と笑いが起こっていた。



▲熱く繰り上げられた応援合戦。

また、「応援の部」で行われたメンバー全員参加の応援合戦では、夏休み前から応援団長を中心に本格的に練習を重ね、とても完成度の高い演舞となっていた。発表後には結果



▲全力で走る生徒たち。



▲綱を握る手に力がこもる。

にかかわらず、一つのことを精一杯やりきった達成感と感動で涙する生徒たちの姿が印象的だった。このように智学館カップは生徒の自主性と、何事にも全力で取り組むという前向きな姿勢が最もよく表れる行事の一つとなっている。

みんなで遊ぼう（入園説明会）ー未就園児と共にー

毎年、次年度の園児募集に向け、7月、9月、10月と入園説明会を3回実施している。就園希望の方々に保育方針や本園ならではの特色などを広く知っていただくために、2011年度から保育参加型の活動「みんなで遊ぼう」に重きを置く形態に変えた。未就園児に在園児と共に遊んでもらうことで、本園の良さを伝え、教員が子どもたちと誠実に向き合っている姿勢を感じてもらうことを目的として、在園児と遊ぶ活動時間を延長し、子どもたちが生き生きと遊んでいる姿を伝えることに職員一同で力を注いだ。それぞれのクラスで自然な形で生まれる活動（遊び）を中心に、教師のアイデアも少し加



▲未就園児をお菓子で歓迎する園児たち。

えていく保育内容。毎回バラエティに富んだ保育活動を展開し、親子で一緒に楽しい時間を共有してもらっている。年長組では、英語遊び「ハローイングリッシュ」なども参観いただき、通常の園生活の様子も伝えることにしている。参加者からは、毎回アンケートを募り、貴重な意見に触れ、次回の課題につなげている。「明日、小さいお友達が



▲ハロウィーンも遊びのアイデアに。



▲幼稚園の楽しさを体験する未就園児。

遊びに来てくれるからたくさんキャンディ作らなくちゃね!」と張り切る姿。今後も、特別ではない普段の保育活動を通して「幼稚園は楽しく遊べる場所だよ」と、子どもたちと共に伝えていける機会として定着させていきたい。

寄付者ご芳名（敬称略）〔2012年7月～9月受付分〕
ご厚情に深く感謝し、以下のとおりご報告いたします。

■教育実践研究所の行う事業支援

個人	
470,000円	諸澤 篤子 *
累計寄付金額 470,000円	

■外国人留学生奨学金の充実

51,250円	ALL TOKIWA DAY 2012 国際交流語学学習センター主催 オークション収益金
---------	--

■諸澤幸雄奨学金の創設・充実

個人	
410,000円	20,000円
竹中 治利 *	柳田 恵美子
225,000円	10,000円
中村 和彦 *	飯田 ミチ子
180,000円	菊池 幸子
保坂 泰夫 *	5,000円
66,000円	宇留野 由紀子
大槻 行徳 *	芳名のみ公表
関 敦央 *	石田 喜美 *
32,000円	工藤 典人 *
久松 雄大 *	関 いづみ *
30,000円	千葉 茂 *
大倉 瞳	堀口 秀嗣 *
27,000円	鈴木 智記
坂井 知志 *	砂押 亜季子

累計寄付金額(再集計) 71,771,026円

◎複数回お申し込みくださいました方は芳名に＊を付し、金額は累計額を表示いたしました。

◎皆さまのご協力により寄せて頂きました寄付総額に変更はございませんが、寄付用途ごとの累計を再集計いたしました結果、本学報にてご報告させていただきます。お送りしておりました使途への累計金額は、上記のとおりになりました。

【寄付金のお願い】

開学100周年記念事業募金へ寄付を賜り、誠にありがとうございます。本学では、諸澤幸雄奨学金制度を創設し、その充実および継続的運営を目的に2009年11月から募金を開始しました。この間、多くの皆さまよりご寄付を賜りました。重ねて御礼申し上げます。学校法人常磐大学では、この制度をより充実させるため、引き続き募金の受付をして参ります。まだご賛同をいただいていない方におかれましては、ぜひとも募金の趣旨をご理解いただき、ご寄付を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。

【寄付金の申し込みおよび問い合わせ】

学校法人常磐大学 修学支援課

TEL. 029-232-2759 E-mail: kifu@tokiwa.ac.jp

※寄付募集の詳細については、ホームページでご覧いただけます。

編集後記

朝晩の空気も冷たくなり、本格的な冬が訪れました。世界経済や国際情勢も今はただ、じっと春を待つ季節に入っているようです。しかし、こんな時代だからこそ、重要になってくるのは教育です。明るい未来を切り拓ける優れた人材を育成するため、教職員一丸となって、2013年も努力してまいります。

information

お知らせ

学校法人常磐大学 同窓会館利用案内

学校法人常磐大学同窓会館は、大学院、大学、短期大学および高等学校の各同窓会ならびに各 PTA 等の支援団体、その他卒業生や在学生など常磐大学の関係者のさまざまな活動に広く利用できる施設です。各年代のクラス会、各課外活動における保護者会、さらには、地域における講演会、講座開講などにも利用されています。

同窓会館の利用については、次の通りです。

【対象】

- a) 本学の卒業生、および在籍者とその保護者による諸活動
 - b) 本学に勤務する者、過去に勤務した者による諸活動
 - c) 地域住民、企業、団体等の諸活動
- ※宗教活動、政治活動、および営利目的の活動については利用不可。

【開館日】

・毎火曜日～毎土曜日 9時00分～21時00分

【休館日】

- ・毎月曜日、第1・第3金曜日および国民の祝日
- ・本学夏季一斉休業期間
- ・本学冬季一斉休業期間
- ・本学が定めた日（利用申請の無い日曜日、他）
- ・開館日・休館日の日程は、業務の都合により予告なく変更となることがあります。

【利用料金】（1時間当たり）

会場	対象	a	b	c
応接室・会議場	無 料	800円	1,000円	
楓ホール	無 料	1,500円	2,000円	

【利用申込】

事前に卒業生センターへ電話、FAX 等で照会の上、申請書を提出してください。

【問い合わせ先】

学校法人常磐大学 卒業生センター

〒310-0036 茨城県水戸市新荘 1-7-26

電話・FAX 029-231-8162 E-mail aac@tokiwa.ac.jp

http://www.tokiwa.ac.jp/aac/hall/index.html

事務取扱時間 火曜日～土曜日（休館日を除く）

9時00分～17時00分



▲同窓会館外観。



▲同窓会館楓ホール。